

## 学び続ける楽しさ

角田恵治さん（昭和9年生 金山町）

金山町民芸品創作研究会の長老で、金山町マタタビ工人の中で唯一の“名人”だ。毎年12月～3月の間、町内外から人が集まり、名人と指導者を中心にマタタビ細工の制作に取り掛かる。

金山町のマタタビ細工の特徴は、大変細かく芸術的な貫禄と美しさがあることだ。その裏には、綿密な“計算”がある。

まず初めに完成形のサイズを決め、そこから逆算してヒゴの幅と本数を決める。

ミリ単位で出された数値に忠実に、正確に編み進めていく。

「教わっていた頃の人たちは、計算機なんかは使わねえ。頭の中の設計図だけで編んでた」。

長くマタタビ細工をやっていた工人たちは、経験から培った勘で頭の中に描いた図面を頼りに、今にも勝る緻密で正確な箆を編んでいたようだ。



「あそこに集まる人は、みんなが指導者」。

経験や器用さでうまい人はもちろんいるが、各々が自分の作り方を研究して、車座になった場でその技を共有する。

いいなと思ったら盗むし、真似して上達していく。

場を共有するみんなが、聞けば惜しみなく技術を教えてくれる。

しかし、教えてくれた本人は、更にその場を通して技を磨く。

目標にしていた存在、作品は毎年先に進むので、なかなか追いつくことができない。

だからこそ、それに追いつこうと、その場にいた後輩たちは研究と修練を重ねる。

結果的に、全体の技術力が年々向上し、より緻密で洗練された箆が生まれてくるのだ。

「展示会のような、見てもらう機会が大事だ。

自分も他人の作品を見ることで、次なる作品のアイデアを貰う」。

今年挑戦したのは、1本箆編みで立ち上がる箆だ。

通常縦1本だと目が締まりにくい、細かいヒゴで隙間がない、労力を感じる箆だった。



「毎年何か新しい技に挑戦する。歳と共に昔できたことができなくなることも出てくるが、今からできることを見つけて挑戦していくから、楽しい」。



退職をした60歳頃から始め、名人となつてからも集まる人の中で学び続け、気づくと最長老になっていた。

「長年やっても、毎年疑問が出てくる。それをひとつひとつ解決していく。できないとおもしくねえから、やりいいように改良を重ねてくんだ」。

かつて先達を目指して編んでは解いていた頃、必死に計算機を叩いて出した数値に沿って編んでも、思う通りには行かなかった。

目に見える数値に捉われるのではなく、集まった同志それぞれから学び、ひとつひとつの作品と丁寧に向き合っ

て、手さばきや姿勢、技を盗んでいけば良いと言う。

「常に学ぶ姿勢が大事。焦らず気長に、丁寧に、だ」。